幼児の教育　第101巻　第4号　平成14年4月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

14. 4. -5

2002年4月号

第101巻　第4号　日本幼稚園協会

人気シリーズ　第５弾！！

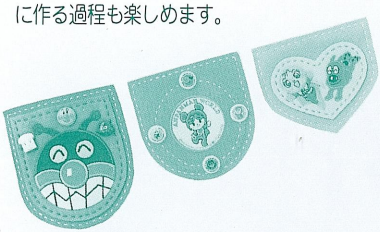
最新刊

手づくり アンパンマンがいっぱい 5

通園グッズ

＊保育者やお母さん方の感性を活かして、楽しんでつくれ、子どもにも喜ばれるものばかりです。
＊原寸型紙（一部拡大必要あり）付で、作り方もイラストで紹介。見ているだけでも楽しく、つくればもっと楽しいものです。
＊作品をカラーで紹介、見やすく読みやすい画面構成です。

＊アンパンマンの楽しいキャラクターが、通園バッグやシューズ袋、お弁当袋、おひるねグッズ、手提げバッグ、帽子などなどについてきて、いっしょに登園。アンパンマンの元気パワーで、毎日の通園が一層楽しくなります。
＊既成の素材をうまく活用して、簡単に手づくりできるものばかりですので、子どもと一緒に作る過程も楽しめます。



☆島田明美（しまだあけみ）
神奈川県生まれ。東京デザイナー学院卒。
ペーパークラフトなど造形活動中心のフリーイラストレーター。テレビ出演も多く、NHK「ひとりでできるもん」、BS日テレ「それいけ！アンパンマンくらぶ」などの工作コーナーに出演しています。

島田明美／著

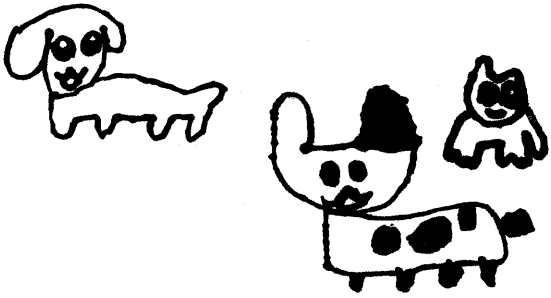
ＡＢ判　96頁　定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第101巻　第4号



幼児の教育

目次

——第一〇一巻　第四号——

巻頭言「幼児を尊重すること」を考える……関口はつ江…（4）

三木成夫といのちの世界

(一)まず、三木成夫の生涯について……吉増　克實…（8）

TO・NI・KARAひろば　その一……嶺村　法子…（18）

思いを受けとめて……中島千恵子…（21）

モンテッソーリ教育思想の誕生(4)

女性解放思想と新しい能力観……早田由美子…（26）

© 2002
日本幼稚園協会

遊びを通して子どもの育ちを考える(1)
「飛行機を飛ばそう」から怪獣との戦いが始まった……阿部　康子…（34）
絵本三昧　(3)絵本の使い手の視点から……宮地　敏子…（43）
育児に悩む保護者に保育者ができること……渡邊ユカリ…（48）
第二回保育参加ウィーク「四勝一敗」……入江　礼子…（56）

表紙絵／佐々木麻こ
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ
編集委員／田代　和美・桝田　正子・高橋　陽子
編集部／仲　明子

巻頭言

「幼児を尊重すること」を考える

関口はつ江

新学年が始まる四月、世情は閉塞感が強いこの頃であるけれども、幼児達の世界はいつも開かれて明るいものであって欲しいと心から願わずにはいられない。保育者はその幼児の世界を守り育てるべく心を込めて幼児にかかわり、それを支えるべく保育の研究が進められている。しかし、実践も研究も常に発展の途上にあることを忘れずに反省的でありたいと思う。

特に現代の合理主義的な考え方の風潮のもとで、ともすると幼児本来の生活を置いてきぼりにして大人の思考が先走っていないか、慎重に考えなければならないのではないだろうか。大人の視点で状況を分析して幼児の行動を技巧的に誘導したり、統合的な状態を細分化して整理し、決着を急いで、そのことで幼児の側の主体的な育ちを損なっていないかに

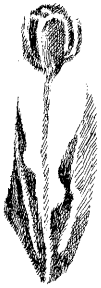
ついて考えておきたい。

最近、保育実習生のレポートに「先生も大変だね。そんなに褒めなくてもいいんだよ」と園児に言われたときの衝撃が述べられたり、ある母親が「僕の組は厳しいんだよ。お絵かきの時にお話してはいけないんだよ」と我が子が言ったときの「厳しい」というニュアンスに驚いたと語ることなどに出会った。今の幼児の一面を窺うことが出来る。

褒められて「嬉しい」と喜び、注意されて「いけない」と素直に思うのではなく、相手の意図を斟酌したり、相対化しているとすれば、環境に対して心を全開して受け入れようとする幼児の心性とは相容れない。今の幼児は鋭い、と片づけてしまってよいだろうか。保育の場においてすら人に対して構えさせてしまっているとしたら、素朴で柔らかな幼児期の心によけいな負担をかけている保育の現状があると思わざるを得ない。

こうしたことは、保育者が幼児のその時々の気持や状態を大切にして、そこを保育の起点とすることをしないで、保育者の意図を先に立てておいて、間接的にそれを表し、それとなく（幼児が自ら動いたように）幼児の行動を促すことが、幼児の主体性を尊重する保育方法であると考えやすいことと無関係ではないように思われる。

例えば次のような場合について考えてみる。ある子が何かを作ろうとして空き箱をいくつも持っている。分けて欲



しい子に譲ろうとしない時、保育者が「一ついくらですか」とごっこの形を作る。「〇〇円」と答えたところから箱は無理なく分けられ、さらにごっこ遊びに発展したとする。しかし、その保育者のかかわりはその子が始めにイメージした遊びをやり遂げることにも、自分から決断して他に譲るという主体的行動にも繋がってはいかないだろう。

また、帰り支度をしないで遊んでいる子に「誰の落とし物？」と言い取りに来させたとする。身支度を間接的に促してはいるが、本人が自分から身支度することに気持を向けると言うよりその物を早く始末させることになっている。仲間関係についても次のようなことがよくある。ある子がその子と遊びたい相手を拒否してしまう。保育者は誰とでも遊べるようにしてやりたいとのおもいから間に入り、遊びたくない理由を聞き出して「もうそうしないと言うから遊んであげよう」と説得する。二人が一緒に遊ぶと言う結果はでてもその子自身が相手と遊ぼうと思った場合と意味がちがっている。保育者に聞かれて答えたことは気持の一部かもしれないし、「もうしないと言うから遊べる」は大人の理屈であろう。

しかし、こうした場合一般的に幼児はそれを受け入れざるをえない。幼児が保育者の提案を進んで受け入れているように見えても「保育者と幼児」という力関係から幼児は最終的には保育者を拒否できないからである。やさしく言われればなおのことである。

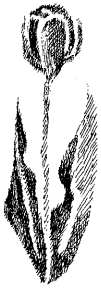
近年、見守る、待つ保育の問題点が指摘され、保育者の役割が見直されている。しか

し、幼児の何を育てるのか、主体的行動を促すとは如何なることかを問わずに、幼児が「否」と言えない状況が作られることが多くなると、幼児の行動は保育者の意に叶っても心は離れているであろう。幼児と保育者の思いのやりとりがないからである。

保育のねらいの一つは幼児が自分でよりよく行動する力を育てることである。先の例で言えば、幼児が自分の思いを実現して何かを作ったり、自分から他の子に物が譲れたり、身支度をしたり、また、友達と仲良くしようとする気持をもつことである。その場でのその子の問題に向かい合って「分けてあげてね」「お支度しよう」「仲良くね」のように保育者の気持ちを直接表現することはやり方によっては押しつけになるが、幼児はそのことを考えなければならないし、決めなければならない。即座には保育者の意に添わなくても、そのことの意味が伝わっていれば、やがて自分からできるようになるであろう。

現代の幼児を取り巻く環境や発達的な課題の質や量を考えると、幼児の真の主体性を育てることが如何に難しいかは言うまでもない。根本的な問題に立ち戻りながら、幼児がありのままの自分を表現し、幼児らしい力を十分に発揮し、且つよりよい行動を自ら選び取ることが出来るようにするにはどうしたらよいのか、幼児を尊重するとはどうすることなのかについて、現実に則して考えて行きたいと思う。

（鶴見大学短期大学部）



三木成夫といのちの世界

吉増　克實

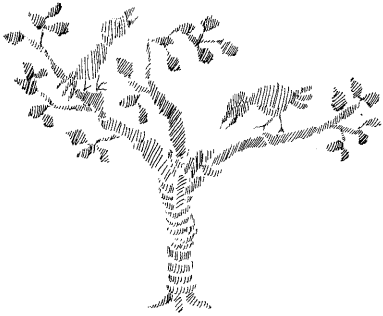
(一) まず、三木成夫の生涯について

三木成夫（しげお）というなまえをお聞きになったことがありますか。「胎児の世界」、「海・呼吸・古代形象」などの不思議な魅力を持ったその著作については、本誌でもこれまで一、二度ご紹介したことがありますのでご記憶の方もいらっしゃるかもしれません。三木成夫は、昭和六十二年六十一歳でなくなりました。生前にも、直接交流のあった人々をその人格から発散される独特のオーラで魅了していましたが、しかし、むしろその死後、遺稿が整理出版されるにつれ、著書を通じてはじめて三木成夫に出会った一層多くの人々を、次々とその魅力のとりこにしてきています。そして時がたつほどにますます共感の輪が広がってきているようなのです。さまざまな雑誌に特集記事が組まれたり、いろいろなシンポジウムが開かれたりしてきてい

ます。どうやら三木成夫の世界には現代社会が見失い捜し求めているいのちとこころの世界への手がかりがあるようなのです。いま、三木成夫は、いのちとこころの世界をとりもどそうとする人たちの大きな共感中心のひとつになってきているようなのです。

私は、医学部の学生のころに、三木成夫の解剖学の講義や解剖実習の指導を通じてその世界に魅了されました。それは「三木体験」といってよいような衝撃的体験でした。それまでに親しんできた自然科学とはまったくちがった生命の見方があることを知らされたからです。それはまたこころの世界への扉を開いてくれる体験でもあったのです。私が精神科の医師としてこころの医療に取り組むことになったのも、すべてはこの「三木体験」が出発点になっています。三木体験がおしえてくれたいのちとこころの世界の探求を続けることが私自身の人生の課題となっています。三木成夫についての話を頼まれるとできるだけお引き受けするようにしているのもそんな理由からなのです。三木成夫の語る世界はその独自性のために「三木学」と呼ばれたり、おもしろがって「三木教」と呼んだりする人もいます。三木成夫の個人的な魅力に引かれて熱烈なファンになったひともいて、三木教の信者だと言われたりします。そうなると私はさしずめ三木教の宣教師ということにでもなるでしょうか。この連載を通じて、三木成夫の世界の魅力をさらに多くのかたがたにお伝えできればと思っています。

六回の連載の始めに今回はまず、はじめて三木成夫の名前をお聞きになる方のために、三木成夫の生涯を振り返っておきましょう。これか



らお話することの大まかな見当づけにも役立つと思われるからです。

おいたち

三木は大正十四年十二月二十四日、香川県丸亀市に産婦人科医の四男として生まれました。姉一人兄三人の末っ子でした。何事につけても早熟な才能を示したようですが、とりわけ書道や音楽、美術など藝術全般に対して強い関心を示し、また天分にも恵まれていたようです。小学生のころ書道に抜群の才能を示し四年生で全校代表になりました。甲子園を目指して野球に熱中するお兄さんが宿題の習字の代筆を頼んだところ、それが百点満点の百五十点を取ってしまい、お兄さんも驚くやら困るやらといったことがあったそうです。

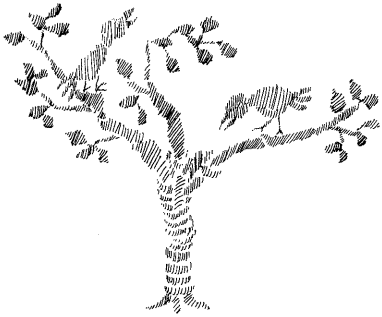
地元の丸亀中学に首席で入学、第二次世界大戦のさなかの昭和十八年、岡山の第六高等学校に進みました。水泳が得意で水泳部にも所属していたそうです。高等学校を卒業したあと九州大学の工学部航空機学科に入学しそこで飛行機を作る勉強をするはずだったのですが、半年も経たずに敗戦により学科が廃止となり、翌年東京大学医学部に入学しなおしました。昭和二十一年のことです。しかし医学部在学中は当時まだ藝大の学生だったバイオリニストの江藤俊哉さんのところへ押しかけて、弟子はとらないといって断られるのを無理やり弟子にしてもらいバイオリンの練習に熱中しました。バイオリン作りの先生についてバイオリン作りに励んだり、絵の会に入って絵筆を振るったり、医学の勉強よりも藝術三昧の日々を送り、そのため一年留年してしまったほどでした。

解剖学者への道

昭和二十六年医学部を卒業した後、同じ東京大学の解剖学教室に入り小川鼎三教授に師事して本格的な解

剖学の勉強をはじめました。解剖学者として生命の形を研究する傍ら、なお同好の友人たちと絵筆を握ることもあったようです。三木の美術的才能は後年、自分の認識を数々の美しい図版で示すという形で開花結実することになります。解剖学教室に入室して二年目にうつ病になり、精神科医で仏教、ゲーテ、クラーゲス研究でも知られる東京女子医大の千谷七郎教授の診察を受けます。次第に生命の本質、人間の生き方といった哲学的な問題にかかわるようになり、千谷教授の導きで在野の仏教学者富永半次郎に師事し、原始仏教や老子や孔子などの東洋思想、古事記、源氏物語、其角の俳諧などの日本の古典、ゲーテの文学や自然学、生の哲学者ルードビッヒ・クラーゲスの哲学などの勉強を続けました。その過程で次第に独自の解剖学を発展させる基盤が形成されていったようです。

昭和三十二年、東京医科歯科大学の解剖学教室に移り研究と教育に携わるようになったころから、ゲーテの植物の研究にある「原形とメタモルフォーゼ」にもとづいた「すがたかたちの解剖学」を講義するようになりました。ゲーテは、自分の観察を通じて、植物の花びらやおしべやめしべは葉がそれぞれの部位で変形したものと見ました。むしろ原形としての原植物というものがあって、それが部位によって次々にすがたを変える、つまりメタモルフォーゼすると考えました。三木もそれをヒトのからだに適用しました。人体は本来ミミズのように頭もくびも胸もおなかも同じ形をしているものが、部位によって変形しすがたを変えたものであると言うのです。そして原形としての本来のかたちとはどのような



ものであるか、各部位でそれがどんなふうに変化したかを示しました。ヒトのからだは人間の作る機械のように人間の欲求に従って目的に合わせて都合よく作られたものではなく、何億年もの地球の歴史の中で、本来のかたちが新たな環境への適応のために何回もの増改築を重ねて変形されてできたものであり、ヒトのからだの各部分にはその歴史が年輪のように刻まれているというのです。その講義は、無味乾燥な医学部の講義のなかで異色の魅力を放つものでした。

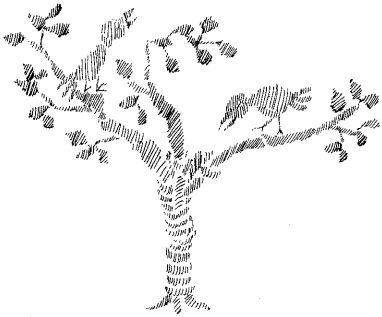
この研究を深めるため昭和三十七年「個体発生は系統発生を繰り返す」というドイツの発生学者ヘッケルの言葉に導かれ、東北大学の解剖学教室に浦良治教授を訪ねて、さまざまの種の異なる動物の胎児の血管に墨を注入して比較する「比較発生学」という方法を学びました。浦教授はそれまでにすでに米粒のようなさまざまな動物の胎児の小さな小さな心臓にガラスの針で墨を注入し、それを顕微鏡で観察して血管がどのようにして生まれ形を変えていくかを研究していました。ヘッケルは、受精卵は細胞分裂を繰り返しながらそれぞれの種に特徴的なからだを形成していく過程で、生命の歴史、進化の歴史を繰り返すというのです。しかし、人間ではたとえば魚の段階はあっという間に過ぎてしまい観察できません。歴史の古い生命形態ほど古い段階をゆっくり見せてくれるのです。人間ではすぐに過ぎてしまう段階が両生類のサンショウウオではゆっくりと、ヤツメウナギではもっとゆっくりと見られるのです。三木は、浦教授から教わった血管注入法を用いて、その役割が良くわからず謎の臓器と言われていた脾臓のなりたちを明らかにしました。脾臓という臓器は脊椎動物の種類によってさまざまにすがたを変えていくのですが、そこに生命の歴史において海で生まれた生命が上陸するという壮大な出来事が映し出されているということを示したのでした。

生前に書かれた数少ない著作のうち、看護者教育の

ための教科書として書かれた「解剖・生理」（『生命形態学序説』うぶすな書院）と、科学百科事典の一部として書かれた「ヒトのからだ――生物史的考察――」（うぶすな書院）はこのような時期に書かれました。「動物性器官と植物性器官」と「体壁と内蔵」や「あたまとこころ」の関係、「しかけしくみとすがたかたち」などの問題がすでにはっきりと取り上げられています。この間、昭和三十六年に結婚し、二人の子どもに恵まれますが、単に子煩悩な父という以上に、子どもたちとの交流のなかで子どもたちの心の発達を独自の観点から見てたくさんの事を発見していきました。それらの体験は、無心に遊ぶわが子の姿を記録した多くの写真とともに子どもの心の発達について書かれた後の著作のなかで重要な役割を果たしています。

解剖学を越えて

昭和四十八年、東京医科歯科大学を退職し、東京藝術大学の保健管理センターの所長に就任しました。自然科学に基づく医学の研究では、見出した所見が真理であることを「実証」しなければなりません。それは特に生命研究においては多くの動物のいのちの犠牲を要求しもするものなのです。それまでにさまざまな動物の胎児の拍動する心臓に血管注入を試みてきた三木はヒトの胎児を前にして立ちすくみます。わが子の成長を見守る父親のこころはすでにその作業を不可能にしていたのです。しかしそもそも実証とは、こころで感じられるひとには明々白々な事実を、感じられない人にあたまで納得させようとすることにすぎません。ほんとうにわか

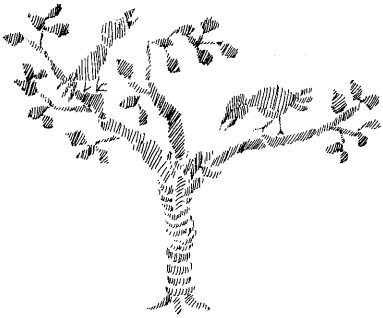


るとはこころでわかることであるとすれば、実証の作業はかならずしも必要ではなかったのです。この時期、長年取り組んできた「すがたかたちの解剖学」は深まりを見せていました。いのちのかたちをいっそう根源的に宇宙的な生の原形の現われとしてみていこうとし、「生命の形態学」として総論から各論へと連載が続けられていました。しかし、各論の循環器を最後に中断され二度と完成されることはありませんでした。三木成夫自身の思想の発展における大きな節目に差し掛かっていたのです。

しかし、藝大に移り、医学的実証研究の要求から自由になった三木の思想は、さらに深まりを見せ飛翔力を増し、その魅力で藝術を学ぶ若者たちの心をもとらえていきました。解剖学の枠を越えて生命の世界の思想を説く三木の講義は学生たちの創作活動にさまざまな影響を与え、「植物的なものと動物的なもの」や「胎児の世界」、「根源形象としてのらせん」などと関連したテーマでの造形作品や音楽作品として結晶します。しかし何よりも、圧倒的な人格的魅力で学生たちの心をとらえたようです。三木にとっても藝大は「第二の故郷」でした。青年時代を藝術三昧にすごした三木のこころが芸術家を目指す学生たちの心と響きあったのでしょう。三木はこころの危機に悩む学生たちのよき相談相手として、こころの医者にもなっていきました。しかし、精神科の専門的訓練を受けたことのない三木にとって、その診断も治療も自分が研究してきた生命の形態学にもとづくしかなかったのです。その意味でこころの医者としてもまったく独特の医者であったのです。朝が起きられない学生たちに見られる睡眠覚醒のリズムの障害を、生命が海にすんでいた時代の潮の満ち干のリズムがよみがえったものと生物学的に意味づけていることもそのひとつです。潮の満ち干のリズムとは月のリズムです。それは女性の月経周期に残され、生まれたばかりの赤ん坊の睡眠覚醒のリ

ズムにはそのまま残されていますが、やがて太陽のリズムによって覆い隠されていくものです。うつ病の日リズム変調とされるものの生物史的意味を解き明かしているのです。このような考えにもとづいて、薬ではなく独自の睡眠リズムの調整法を学生に薦めていました。未刊の解剖学総論草稿（註1）のなかで、もともと、三木はこう述べていました。「生物の現象の『かたち』を通して『こころ』を見るとき、前者に焦点を当てれば『形態学』が、後者に的を絞れば「心情学」がそれぞれ成立することになる。この生中心の思考に依存する限り、われわれはこの両者の間でのみ自然に対することになり、そこでは学問、藝術のすべてが『生の学』として統一されるのである」と。三木にとっては学問も芸術もひとつの根から生まれるものでした。そして学問から芸術の場に生きる場所を移したときに、おのずといのちのかたちから、いのちのこころへと関心は発展していったのでしょう。

晩年、三木の関心は、よりいっそう根源的ないのちの世界を求めて植物的なものへのめりこんでいきました。生命の本質は動物性器官にではなく植物性器官にあること、つまり、感覚器や脳神経や筋肉からなる体壁にではなく、消化器や循環器や生殖を担う内蔵に生命の本質があるというのです。動物性器官と植物性器官とは、それぞれの中心的臓器、脳と心臓によって代表されます。そして脳は「あたま」のはたらきを、心臓は「こころ」のはたらきを象徴します。そしていのちの本質は食と性のリズムという根源のいのちのリズムを担う植物性器官に、こころの本質はこころの動きに伴って脈打つ心



臓にあることを強調しました。最晩年のゲーテもいのちの原形を植物に見出していたのです。昭和五十七年に「みんなの保育大学」叢書の一冊として出版された『内臓のはたらきと子どものこころ』（註2）では、子どものこころのめざめには「内臓感覚」が大切であると述べています。昭和五十八年に出版された『胎児の世界――人類の生命記憶』（中公新書）という著書は中断した生命形態学以降の思想の展開を取り込んで、三木成夫の代表的著作のひとつとなりました。そこには生命記憶のことが、つまりわれわれ一人一人のからだには意識されないままに三十数億年の生命の歴史が記憶されていること、小宇宙としてのからだに大宇宙の根源形象が再現されることが述べられています。さらになくなる年に書かれた「南と北の生物学」では町や家のつくりをはじめとする人間的な営みの中にも生命的構造をみようとしていました。三木成夫の関心は動物植物といった個々の生命形態を越えて宇宙的な生命の本質へと向かっていたのです。それはわれわれを生み出し、また迎え入れる母なるものの世界であったようです。私たちのからだに潜む根源のリズムは、生命がかつて、陸に上がろうか海に戻ろうかとためらいつつ過ごした何億年かの間に、なぎさで聞いた寄せる波のリズムである、母の胎内で聞いた血潮のリズムである、と。

死、そして…

昭和六十二年八月十三日三木成夫はなくなりました。脳出血によるまったく突然の死でした。葬儀には医学、藝術関係の友人知人教え子のみならず、大勢のまた多彩な顔ぶれが集まりました。三木成夫の死を惜しむ人々によって追悼音楽会や追悼作品展が開かれ、三木成夫記念シンポジウムが開かれました。また、ふたつの追悼文集が出版されました。うぶすな書院の塚本氏によって遺稿がまとめられ『生命形態の自然誌』

（うぶすな書院）が、ついで『生命形態学序説』（うぶすな書院）が出版されました。そして死後十五年たちましたが、不思議なことにいまなお人々の心の中で三木成夫は生きつづけ、むしろ少しずつ共感のネットワークを広げていっているのです。続いて出版された『海・呼吸・古代形象』（うぶすな書院）はこれまで以上に多くの読者に迎えられています。記念シンポジウムはその後も続けられ、二年に一度だったのが毎年開かれるようになっています。『現代思想』、『モルフォロギア』、『詩と思想』などの雑誌で特集が組まれました。生まれ故郷の丸亀には「三木成夫の会」（註3）ができて、三木成夫に共感する人々の集まりが開かれているようです。三木成夫の形態学をテーマにして現代美術に関する公開講座が開かれています。これほどまでに多くのヒトをひきつける三木成夫の思想とは何なのでしょうか。次回からあらためて、一つ一つ詳しく取り上げていくことにしましょう。

（東京女子医科大学第二病院）

註

（1）うぶすな書院から出版されている『生命形態学序説』に収められています。

（2）築地書館から増補版が出版されています。

（3）三木成夫関連のホームページがあります。リンク集から三月書房の三木成夫の本のリストのページを参照すると入手可能な関連の著作の一覧を見ることができます。
(http://www.geocities.co.jp/Bookend-Hemingway/2397/

TO・NI・KARA ひろば

その一

嶺村法子

保育の仕事を職業として選択して十三年がたちました。

保育者としての私は、子どもの今を支えつつ、子どもTO共に生活し、子どもNI私自身の身体を通して文化を伝え、子どもKARA学ぶ機会を与えられています。まさに、子どもTO・子どもNI・子どもKARA――だから、いただいた誌面を〝**TO・NI・KARAひろば**〟と名付けてみました。

都心に住む子どもたちの四季折々の姿や声を拾って、この小さなひろばからお届けできたらと思っています。

オフィスビルと大通り、路地ともんじゃやが混在する街、中央区月島。その街で今年四十九周年を迎える園児数約八十人の幼稚園が、今の私の勤務地です。

併設の小学校と共有の、ビルに囲まれたウォークトップの園庭にも春はやってきます。フェンスに囲まれた植え込みに、花壇に、プランターに。

もえぎ色の新芽がまぶしい春、二十三人の子どもたちと一緒に私も進級し、年長組の担任になりました。

そして、今年の春はこんな風に始まりました。

春はやっぱりよもぎまんじゅう
乾燥よもぎは年中あるが　今しか摘めない
よもぎの新芽

TO・MI・KARA ひろば

足取り軽く口ずさみつつ　園庭の隅の植え込みの中によもぎの新芽を探しにいく

「さきっぽの白いところね」

と摘んで見せても

「先生、これ？」

と大きな葉っぱを裏返し　白い方を見せに来る

「このね、ほら、こうやって大きい葉っぱを取っていったら、銀色の毛がついているところが残るでしょ。ここのところだけなの。ここが一番おいしいんだって」

「ねえ、こうやって？」「これでいいの？」

何度か摘んでいるうちに

今芽吹いたばかりのような銀色のよもぎがかごに少しずつたまってくる

「これくらいでいいかな」「これらいでいいよね」

「さあ、じゃあこれをゆでて、ごりごりつぶしておまんじゅう作ろう！」

かごを持って駆けだしていく子どもたちを後から私も追いかける

煮立った湯がさっと緑色に変わって

春の匂いが立ちこめる

すりこぎをえいっと回すたび

春だ春だと匂い立つ

どろどろこねこね　ぺたぺたころころ…

TO・NI・KARA ひろば

職員室から廊下へ　玄関へ
あのなつかしい　おまんじゅうをふかす匂
いが流れ出す
おばあちゃんちに来たような…

「うわぁっ！」「できたよ！」
はじけた生地の間から
苦労して包んだあんが　ちょっと顔を出し
たのやら
水をたっぷり付けられて
すべすべお肌になったのやら
とりどりに並んだ蒸し器の中から
朝から二時間の
子どもたちの思いが湯気と共に立ちのぼる

「ごちそうさま」「すごぉく、おいしかっ
た！」

小さい組の先生からお礼を言われ
「やった！」「大成功！」
の　大きい組の春

「子どもたちとよもぎまんじゅうを作りた
い」と提案した私を、「確かあの辺によもぎ
が生えてるわよ」「わぁ、楽しみ。おいしい
の作ってね」という声が後押ししてくれる。
気持ちよく火の番をしてくれる主事さんがい
て、子どもたちの思いが形になる。
　食を巡るいろいろな事件が後を絶たない
中、煮炊きする湯気の中で保育できる幸せを
思う。
　道ばたの草々に季節を感じ、生活に取り入
れて豊かに暮らしてきたこの国の文化を、共
に生活するものとして子どもたちに伝えてい
きたいと思う。　（中央区立月島第一幼稚園）

思いを受けとめて

中島千恵子

園庭の桜の蕾がふくらみ始めるとまもなく新学期である。私達教師は、早く一人一人の子どものことを知りたい、わかりたい、気持ちを受けとめていきたいという思いを持って日々保育にあたっている。どの子どもも幼稚園生活を充分楽しんでほしいと願っている。

しかし、実際の保育場面では「どうしてこんなことをするのだろう」「どう関わっていったらいいのだろう」と思い悩むことが多い。毎日の保育の多忙さに追われ、どうしてこの子はちゃんとやらないんだろうとあせったり、子どもの思いをおおらかに受けとめられないこともある。そんなかみあわない思いを明日こそは何とかしたいと思い、子ども達との生活を積み上げている。

どうやって関わったら

四歳児クラスのS男は、好奇心旺盛で見るものすべてに触りたくなり、そう思った瞬間にはもう手が

出ているというくらい行動が素早い。

乗っている子を押しのけて自転車に乗りトラブル。他の子が作った剣を持って行きトラブル。それをつぶしてトラブル。通りすがりにたたいたり、皆が集まる時にそばにいる子を押したりしていやがられるという毎日であった。感情が高ぶると攻撃的になることもあった。幼稚園に来てかなり興奮状態になり、友達と関わりたいという気持ちで触ったり押したりしていた。

またこの頃の園生活は教師の手がいくつあっても足りない状況で、とにかくトラブルを制する言葉が多くなっていた。担任も何とかしたいという思いを持ち続けており、他の教師達も何とか担任をサポートしたいと考えていた。

格好いいの作ったね

ある雨の日、保育室内での遊びの様子を見に行った。S男は製作コーナーで牛乳パックを使って作ろうとしていた。うまく鋏で切れないらしくやや表情がかたくなっていた。隣で作っているT男に話しかけながらそばに座ると、「ねえ切って」と言う。「どこを切るの？」と聞くと「ここ切って」と牛乳パックの下の方を指さす。「何作るの？」と聞くが答えない。「ここ切るのね。ちょっとかたいなあ。これはかたくて大変だったね。こっちなら自分で切れるだろうけど」と言いながら鋏で切る。S男は「かたくてできないんだよ」と言う。すぐにもう一個持ってきて「切って」と言う。「同じ所？」と聞くとうなずく。

S男は切った二つの牛乳パックをセロテープで貼ってつなげようとするがうまくとまらない。「つなげるんだったらこことここを貼るといいよ」と二つの切り口を指さしながら言うと、ちょっと考えて言われた場所にセロテープを横向きに貼る。しかし取れてしまう。「取れちゃうなら横じゃなくて縦に貼るといいかも」と言うと、すぐに向きを縦に変えて

二本貼る。腕を中に通すが剥がれそうになる。「もう少し貼るといいよ」と言うと、S男はセロテープを切り横向きに貼ろうとして「あっ」と気が付き縦向きに貼る。

「ぐらぐらしないか確かめてみて」と言うと、触って「まだ」と貼る。「どう大丈夫?」と声をかける。S男は貼ってからまた触って「まだ」ともう一度貼る。「今度はどう?」と声をかける。S男は五本貼って確かめて「できた」と見せたので、「うん。しっかり付いたね」と言う。

隣のT男がベルトを作り星を付けていたので、「S男くんも星を付ける? 格好いいじゃない」と言うが「しない」と言って立ち去った。

しばらくすると、S男はセロテープの輪を上に付けスコープにし、狙い撃つ真似をしながら見せに来た。「おっ、すごいね。そこから狙うのか」と言うと喜んで撃つ。「やられた……」と教師が床に倒れると笑う。何回も繰り返す。そこにS子が近づく。教師がまた撃たれて倒れるとS男は「おかしいね」と言いにこにこ。「私もできるよ」とS子が教師の真似で倒れる。S男の表情がちょっとかたくなるが、教師が「あら、S子ちゃんは倒れ方が上手だわ」と言うと、今度はS子を撃つ真似をする。何回か繰り返す。また教師の方に向かって来たので「ねえ、今度はこれを撃ってよ」と箱を示す。S男はちょっとつまらなそうな表情で箱を撃つ。撃った瞬間に教師がばっと箱を上に投げると「わお!」

そこへ担任の教師が来たのでS男と二人で見せる。「S男くんすごい。格好いいの作ったし、面白いね」何回か繰り返す。

そして、S男は歩きながら大きな箱で作っているK男を見て「いいのだね」と声をかけた。

この日はたまたまじっくりS男の遊びに関わることができた。最初に牛乳パックが切れないS男の困難さに共感できたことが良かったように思う。

この中で、S男はイメージをしっかり持っていること、目的に向かって邁進すること、ちょっとしたことですぐに感情が動くが教師の一言や手助けのタイミングがあうと落ちつくこと、満足感があると友達にもおおらかに接することなどが改めてわかった。また、S男のしていることを教師がよく見てこまめに言葉かけし、本人が意識して行動していくようにしたり、周りの子どもにわかるように伝えたりしていかなければならないことも感じた。

迎えに来た母親と出会った時にS男が頑張って製作し楽しく遊んだことを伝えた。

あのこと言ってね

次の日は降園前に保育室へ行った。皆が集まる時間は、一日の中でS男への注意が多くなりやすい時である。S男は最前列に座っていた。すぐ立ってぐるりと歩き回り同じ場所に座ろうと戻って来たが、元の場所は周りの子ども達が寄って来て狭くなり入れそうもなかった。しかし、入りたいので元の場所を見据えながら最前列に寄って行った。割り込むかと見ていると、ちょうど担任が絵本を読み始めた。S男はたまたま少しあいていた後ろの場所にすぐ座った。そこで「前に割り込まないで我慢して後ろに座ったのは偉かったね」と声をかけると喜んだ。

絵本の話が終わるとそばに来て「ねえ、あのこと言ってね」と言う。何のことかすぐに理解できず「あのことって何のこと?」と聞くと「我慢して偉かったこと」と答える。「ママに言って欲しいってこと?」と聞くと「そう」

前日母親に遊びを様子を伝えたことが家庭で話題になったのだろう。また認められたい、褒められたいというS男の気持ちを実感した。教師は常に子どもの行動に目を配り、小さな変化を見つけ丁寧な対

応をしていくことが大切なのだと再確認した。

この日は、本人が一緒にいる時に母親に伝えようと思い、帰るのを門前で待っていた。呼びとめてからS男に「今日何のことをママに言うんだっけ？覚えてる？」と聞くと、S男は小声で「後ろに座ったこと」と言った。

心に寄り添って

担任はS男の遊びになるべく関わっていき、楽しさを実感できるようにしている。まだトラブルは多いが、担任の言葉を少しずつ聞くことができるようになったと感じている。これからもあせらずにS男の心に寄り添い育ちを支えていきたいと考えている。

自分中心の気持ちが強い子どもは友達の中にいるとトラブルになりやすい。教師はどうしてもトラブルの際に注意するという関わりが多くなりがちである。しかし、うち消される経験ばかりでは子どもと教師との信頼関係は築きにくくなる。信頼関係がないと教師の助言や助力は子どもの心に響かない。

また、感情的になったり気持ちがこじれてしまったりするとなかなか修復するのが難しいこともある。

ネガティブな面でばかりでなく、遊んでいる時などになるべく教師から関わりその子の思いに共感していくようにしたい。教師が手を添えていくことでまず満足感や楽しさを味わえるような援助を心がけていきたいと思う。

保育の場面ではなかなかその時間を確保することは難しい。しかし、教師が意識して接していくことで、確実に子どもと共感できる瞬間は生まれ増えていくのである。

（千葉大学教育学部付属幼稚園）

モンテッソーリ教育思想の誕生(4)

女性解放思想と新しい能力観

早田　由美子

幼児教育の分野で広く知られているマリア・モンテッソーリも、女性解放思想について唱えていたことはあまり知られていない。十九世紀後半から二十世紀前半は、今日の生活にも深く関わるような多様な学問や思想が花開いた時期であり、女性解放思想もこの時期に発展した。これまで、特に、医学、生理学、人類学からの影響を見てきたが、今回は、女性解放思想との関連でモンテッソーリの教育思想の形成について見ていきたい。

国際女性会議でのモンテッソーリ

女性の高等教育への進学にさまざまな壁がまだ存在していたこの時期、モンテッソーリは医学部に入学するために女性であるがゆえの様々な困難を経験した。

しかし、同じ様に困難の末、学士となった他の女性たちとは異なり、彼女は卒業すると様々な国際会議で演説をする機会に恵まれるなど、世間の注目をあびて活躍することになる。演説のテーマは児童労働の問題や障害児教育の問題のほか、女性問題に関するものも多く、子どもや女性にとって新しい状況を作り出そうとする熱意にあふれた建設的で具体的な提案がなされた。

特に、一八九六年九月、ベルリンで開かれた国際女性会議では「同一労働同一賃金（eguale lavoro eguale compenso）」を主張し、女性問題に関する時代に先駆ける発言を行っていることが特筆される。

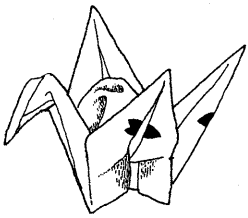
近代化が遅れて始まったイタリアでは、女性解放思想の広がりも他の先進ヨーロッパ諸国より遅れていたが、十九世紀後半になると女性の工場労働者は急増し、一日に十八時間という労働時間や男性の半額という給与など劣悪な労働環境が問題視され始めていた。

そして、これを背景として、労働条件の改善を目的とした様々な組織が誕生し、女性の労働をめぐる議論も行われた。例えば、アンナ・マリア・モッツォーニにより、「女性権利擁護同盟」（一八八一年）や「女性労働者連合」（一八八二年）が設立され、女工や女性電話交換手、女性教師らの低賃金や長時間労働、あるいは女性に対する抑圧的状況の改善がめざされた。また、一八九〇年代末には、モッツォーニとアンナ・クリショフによる母性保護法をめぐる論争が『アヴァンティ！』誌上で繰り広げられ、クリショフが女性労働者の深夜労働の禁止、産休の取得と産休時の給与保障など女性の「保護」を主張したのに対して、モッツォーニが自由な競争により女性の労働を推進しようと主張した。また、一八九七年には、エミリア・マリアーニが同一労働同一賃金の原則を主張し、一九〇〇年には、エミリア・マイノ・ブロンツィアーニが女性に対する保護と男女同一賃金を主張した。

このように十九世紀末になると、イタリアでも女性の地位向上へ向けての動きが徐々に進展し、論争も深められていくのだが、その中でもモンテッソーリによる同一労働同一賃金の主張はかなり早い時期でなされているのである。

また、彼女は、一八九九年六月にロンドンで開かれた女性会議での演説をまとめた論文で、労働の場における女性差別に対して次のように述べている。

「女性労働者には正当な報酬が支払われていない。（中略）女性教師は子どもの教育の約三分の二を担っているが、男性教師よりも低い地位に置かれている。昇進は女性に開かれておらず、学校教師の改善へ向けた改革は、女性教師のことを念頭に入れていないことが多い。女性は秘密を守ることができないという偏見があり、数ヶ月前わが国でおきたように、幾つかの国ではまだ、電話交換手はパンのない家族か、家族のないパンかを選ぶことを強いられる。女性医師や女性の弁護士は、生存競争を生き抜ぬいていくのに社会の偏見や法律自体に障害物があるとしている」（「女性問題とロンドン会議」。原題は《La questione femminile e il Congresso di Londra》in Vita dell' Infanzia, xxxv n.5, 1986.）。



このように職場での女性差別の現実を取り上げ、制度や法の中で組み込まれてしまって自覚されにくい差別的構造や差別的意識の問題も指摘している。

さらに、モンテッソーリーは女性を公的な場から遠ざけてきた社会の仕組みや女性が自ら物事を知り考え、行動し、経済力を持つことを妨げてきた社会規範、さらには、夫に従属して自分を無にして生きることを強いてきた家族のあり方の問題などにもふれた。そし

て、「女性が受身である時代は終わった」と述べ、「正義とヒューマニティの名のもとで」女性が政治的経済的権利を獲得できる社会の確立を訴えた。

男女同一の能力観

モンテッソーリによる同一労働同一賃金をはじめとするこれらの主張の根底には、女性も男性と同様の労働を行える能力をもつという当時としては非常に新しい考え方があった。当時、女性は身体面でも知的な面でも男性より劣った存在として見られ、教育や労働の場で差別されていたが、モンテッソーリはそのような女性観にとらわれない極めて新しい見方をもっていた。この能力観はどこからきたのであろうか。

前回見てきたように、モンテッソーリはセルジやロンブローゾらの人類学者から影響を受けた。特に、「生命の援助」というモンテッソーリの基本的思想はここから生まれていると考えられる。しかし、一方で、当時の人類学は、頭の大きさや手足の長さなどの測定値により男女の優劣を決め、科学の名のもとに男女差別を助長するような面をもっており、モンテッソーリはこの点に異論を唱えた。そして、彼女は人類学と同じ実証主義的方法を用いながらそれまでの研究とは反対の結論、すなわち、女性の優性を示そうとしている。

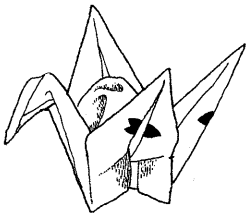
例えば、体重に関して女性は男性の八十五パーセントなのに、脳の重さに関しては九十パーセントであり、体重に比して脳の重量の割合が高く、女性の知能の方が優れている可能性を示唆した『教育学的人類学』。

ここでは、この結論の当否よりも、モンテッソーリが当時の実証主義的方法を用いて主流派の見方とは異なる結論を導き出し、女性の劣等性を主張する人類学の見方を見直そうとした点が重要である。

モンテッソーリは、ロンドン会議で出会った各国の

女性たちが「知性と熱意に輝く目をもっており」、「社会的進歩のために働き」、「普遍的な福祉に貢献する女性」であったことを記録しているが、社会で活躍するこれらの女性たちとの出会いも彼女の女性観に影響を与えていたと考えられる。また、女性解放思想の広がりを傍観者としてではなく、働く女性として、自分自身に深く関わるものとして受けとめ、内面化していたし、自分自身が女性の教育と就業の点で新たな局面を切り開く役割を果たしてきたことが大きな自信となっていた。さらに、モンテッソーリが一つの学問だけではなく、多様な学問思想の動きと成果に敏感であり、多様な視点を偏らずに総合的に採りいれることができたことも当時の女性観から自由になれた理由であったと言えよう。

このような女性観をもっていたモンテッソーリは、女性の多くが就学の機会を得られず、読み書きできず無知であるが故に、産む道具となっている事情を深く憂え、その問題点を指摘した。そして、教育こそがこのような状況から女性を解放するものと考えていた。



生活能力の重視

モンテッソーリは教育問題に視点を移すにつれ、女性の労働条件の問題について徐々に触れる機会を減らし、女性を別の形で援助する方向に進んだ。すなわち、教育を通して女性を援助するという方向である。

当時は、教育を受ける機会についても教育内容についても男女で差がつけられていたために、教育を通して性差が広がる傾向にあった。しかし、モンテッソーリは男女の性にとらわれず、個々人のもつ知的技術的能力の発展が課題であることを認識していた。男女の能力格差の思想から自由であったモンテッソーリは、

男女の枠にとらわれずに教育思想を構築しようとした。モンテッソーリが男女の差異にとらわれない能力観をもったことは、教育に携わる中で男女を問わず子どもの集中力や知的好奇心を発見することにつながった。そしてその発見をもとに男女を問わない知性の獲得を援助する教育へと発展したのである。

人間の能力に関するこの新しい思想は、「子どもの家」（一九〇七年～）での教育において、また別の形で具体的に現れている。モンテッソーリは子どもが自立して生活できるように日常生活の訓練を取り入れ、生活に関わる技術を男女問わず、身に付けることを求めたのである。

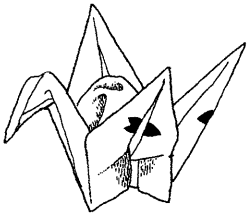
モンテッソーリは「女性も男性と同じくらい自由に社会の中で働くべきだ」と主張したが、社会で賃金を得ることだけではなく、食事の用意や病人の看病といったいわゆる家事の重要性も評価した。そして、男性も女性も家事能力を身につけ自立した生活ができることが大切であると考えた。

「一人の賢明で熟達した職人を思い出してみよう。彼はたくさんの完全な仕事を産み出すことができるだけではなく、職場の全般的な活動を統制し指導する能力があるので、仕事場でアドヴァイスすることができる。彼は他人の怒りに際しても微笑して仲裁者となることができる。しかしながら、われわれは、この有能な職人が自分の家庭で、スープが好みに合わないとか、定刻に用意していないと言って妻をしかったのを知って少しも驚いてはいけない。家庭においては、彼はもはや有能な職人ではない。ここでは熟達した職人はその妻である。彼女は夫に奉仕し、彼のために食物を調理する。彼は、有能である場面では温和であるが、奉仕される場面では横暴である。もしも彼がスープを料理する方法を学ぶならば、おそらく完全な人となることができるであろう！　人生における楽しみと発展のために必要なあらゆる行為を遂行することがで

きる人は自己に打ち勝ち、そうすることでその能力を倍化し、個人として自己を完成する。われわれは未来の世代を有能な人（uomini potenti（ウオミニポテンティ）、すなわち、自立した自由な人にしなければならない」（『科学的教育学の方法』）。

このようにモンテッソーリは男性が仕事をするだけでなく、生活能力を身に付けることで自立した自由な人になりうることを示唆している。このような家事の位置付けは、女性解放思想が発展し家事労働の位置付けの変化した現代にはなされているが、当時の教育学の中ではまず見られないものであった。職人としての能力を生活における家事能力と同等に位置付けたこと、そして、このような能力の形成を男性や男子にも求めたことは画期的な出来事であったと言える。それは、デューイの生活教育とは異なる角度から提起された生活教育の内容であった。家事能力の形成によって、人間が真に有能となり、自立することができ、自由になれるという思想の源泉として女性解放思想の影響を見るのである。

そして、生活技術を男女問わず養成するという新しい要素がモンテッソーリ教育の具体的な方法となって開花し、実際生活の練習は感覚教育や知的教育と並んで、モンテッソーリ教育法の一つの特色となっていった。日常生活における基本的能力とは、生活の中で生きて働く実際的かつ能動的な技術であり、実生活の中で多様な形で生きて展開され、自立的生活を導く生活知であり、男女の生活自立が問われる今日、その意義はますます大きくなっていると考えられる。



家庭の社会化による女性支援

女性解放思想の影響は、「子どもの家」そのものの

社会的位置付けにも見られる。すなわち、モンテッソーリは「子どもの家」を「社会化された家庭」と称して、子育てを共同化する場と位置付けた。すなわち、労働する母親たちを直接労働条件の面からではなく、子育ての面からバックアップしようとした。

当時の女性労働者の多くが乳母に、一部が託児所に子どもを預けていたが、捨て子もまだ多かった。その中でモンテッソーリは「子どもの家」を通して子育てと労働の両立を図ろうとした。それは工場労働者の女性だけではなく教師など中産階層の女性にとっても、子どもの健やかな発達を保証しながら仕事の継続を可能にする機能をもっており、さまざまな階層の働く女性の要望を反映したものでもあった。「子どもの家」には子どもの発達に適した教育の場という意義だけではなく、女性が安心して労働に携わることができるための支援という女性の自立的側面からの意義があったのである。

モンテッソーリは働く親を支援していく必要性を理解していただけでなく、子育てにおける親の役割の重要性も認識していた。そこで彼女は親が子どもを清潔にして「子どもの家」に送り出すことや「子どもの家」の教育に関して教師に協力すべきことなどを明文化して親に自覚をもたせ、教師と親の協力関係の下で子育てを共同化することをめざした。

モンテッソーリは、女性解放思想から影響を受けて、男女平等の能力観を形成し、男女を問わずすべての子どもを対象にした知性の形成の援助という思想を確立するとともに、男女ともに生活技術を獲得することを重視した。さらに、「社会化された家庭」観を築き、働く女性を支援した。

遊びを通して子どもの育ちを考える(1)

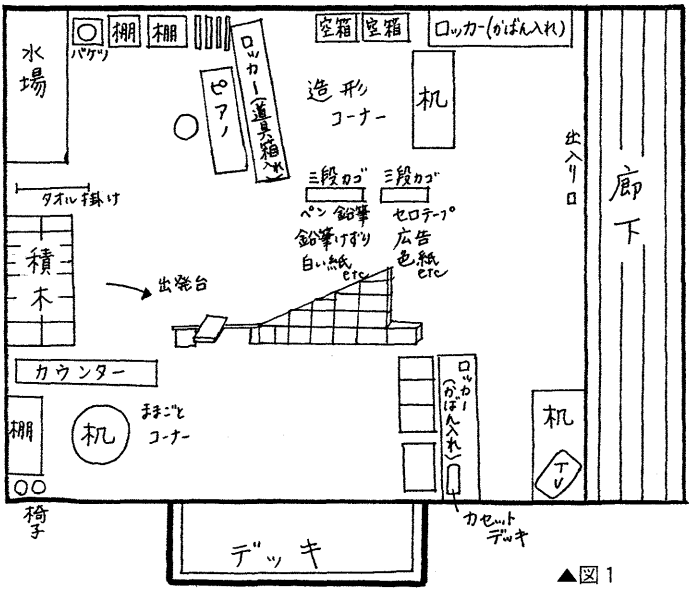
「飛行機を飛ばそう」から
怪獣との戦いが始まった

阿部　康子

四月、満開の桜のもとで新学期が始まった。男児十二名、女児十二名の子どもたちとの出会いである。クラス替えがないので、子どもたちは新しい環境での生活にも大きな不安はなく、むしろ新しい生活への好奇心と期待、新鮮さが、年長組になった！　大きい組になった！　という喜びに重なって、始業式当日から生き生きとした生活が展開された。子どもたちの、特に男の子にとって年長組になってやりたいことの一番は、年中組の時からのあこがれであった、自由に自転車に乗って思い切り園庭を走ることの実現であった。登園活動をすませると、保育者へ「自転車へ行ってきまあす」と声をかけ、園庭へ駆け出し、お気に入りの自転車に乗って思いのままに走らせて遊ぶ、があり、十台の自転車は連日フル活動である。身体のバランス

のとり方、ブレーキの操作、走る速度の調節など、保育者の指導を受けながら交替し合って嬉しい毎日が続いた。

見ていると、子どもたちの一日の始まりは、登園後、まず自転車に乗って思い切り走る、鉄棒や雲梯などで自分の得意技を披露したり、おしゃべりをし合ってしばらく時を過ごす、そして保育室へ戻ってくる。保育室では、造形コーナーで作ったり描いたりが始まる。材料のストローを一センチメートル程の長さに切って糸を通し、ネックレスにする、紙を細く細く巻いたものをストローに入れて口で吹き、吹矢にして戦いごっこに使う、広告紙を巻き上げたものを幾本もつなぎ合わせて天井へ届かせて面白がる、絵本をデッキに並べて「本屋さんの開店」、ままごとコーナーではチュールの冠を被って雪の精ごっこやピクニックごっこが度々登場する、音楽会をやろうと、積み木でステージを組み、楽器を持って集まる等と、毎日多彩な遊びが始まり、どの遊びでも子どもたちはよく喋り、



▲図1

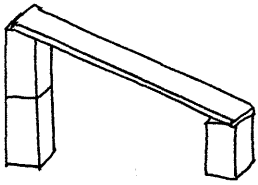
笑い合い、楽しさ一杯である。けれども、どの遊びも計画して準備を楽しんでの段階で終わってしまう。例えば「ピクニックごっこ」でいえば、ピクニックに行こう、と仲良し二人で相談がまとまる→「お弁当がいるワ」とままごと用具からハンバーガー、おにぎり、卵焼き、パン、敷き物、お皿にコップ、とリックサックに詰め込んで出掛ける→保育者が「行ってらっしゃい」と声を掛けると、二人の子どもは「行ってきまあす」とままごとコーナーを後にする→けれども保育室を一回り、ままごとコーナーへ戻ってお弁当を広げ、食べて終わりである。お化け屋敷も、積み木を積んで暗くする、本屋さんも、デッキに絵本を並べる、で終わりである。故にどの遊びも時間は二十分位で終わり、他の遊びへと移っていく。楽しげではあるけれど、本当に遊びこめているのだろうか？　と気になり始めた（図1参照）。

一方ではまだ四月ではないか、前年度の姿が大きく残っていて当然なのだから、じっくり見守るべきではないか、けれど五歳児としての生活は出発しているのだから……環境は、援助は……と、悩んで過ごすうちに五月を迎えた。

五月十一日（木）の朝「飛行機を飛ばそう」から怪獣との戦いが始まった。

牛乳パック飛行機の出発台を作る

登園したたつまとたかゆきが、お帳面にシールを貼りおえると、「飛行機の出発台を作ろう」とたつまが言い出し、たかゆきと二人で、積み木コーナーで積み木を組み始めた。保育者が「自転車には行かないの」と声を掛けると「ウン、行かん。後から行くかもしれんけどね」とたかゆきが答え、二人は出発台を作り続ける。保育者はどんな出発台になるのか、飛行機というのは、昨日牛乳パックを幾つも組み合わせて作ってい



▲図2

た、今ロッカーに置いてある飛行機かな、でも牛乳パックを四個も五個も貼り合わせたものをどうやって飛ばすのかな、と思い巡らせていると、「できた！」とたかゆき。出発台はごく簡単なもので、一方を高く積み、板を渡しただけのものであった（図2参照）。

保育者はどうやって出発させるのかな、と見ていると、たかゆきが「新型のがいるわ」と造形コーナーへ戻り、牛乳パックを材料箱から出して作り始めた。たつまも「僕も作る」とたかゆきに並んで作り始めた。保育者が「昨日作ったあの飛行機は使わないの？」とロッカーの上の飛行機を指して声を掛けると、「あれとちがうやつ」と言って二人はせっせと作っている。

りょうたが怪獣を作る

たつま、たかゆきと一緒に登園したりょうたは、造形コーナーで何かを作っている。

今日は、乳酸飲料の容器を幾つも並べ、「僕は怪獣」と独り言を言いながら作っている。りょうたはこのところ厚紙を切ってはセロテープで貼り合わせて怪獣を作るのが気に入っていて、毎日のように作っては、どこへ行く時にも手に持って行くので、保育者が「なくなるといけないからお鞄に入れていらっしゃい」と言っても、「なくさないからいい」と一刻も手から離さず、お弁当の時も前に置き、降園時になるとようやく鞄に入れて「せんせい、怪獣おうちへ持ってく」と嬉しそうに降園する程の思い入れであった。今日は厚紙ではなく乳酸飲料の容器である。「りょうちゃん、今日の怪獣は○○の容器なの？」「うん、強いのね」「そうか、きっと強いのが出来るんだ。出来たら先生にも見せてね。ご用があったら言ってね」と声を掛け、次々に登園する子どもたちを迎えるのに追われた。

そうこうしているうちに、「せんせい、おっはあ」と元気一杯で挨拶しながらこうきが登園してきた。たかゆき、たつまの飛行機作りに目を止め、「なにやっとる？」と近づいて声をかけた。たかゆきもこうきの

登園に気がついていて「こうきも仲間になる?」と即応して誘うが、こうきが黙っているので、「オレ0号! こうき1号になってもいいよ」と再びこうきを誘っている。何事にも一番でないと気に入らないこうきが、たかゆきの誘いをどう受け入れるのか気になって見ていると、「オレ、合体出来る飛行機にしよう」と言いながら、黙々と飛行機を作っているたつまを覗き、材料箱から牛乳パックを出して作り始めた。

怪獣作りのりょうたは、「せんせい、僕の怪獣」と出来上がった怪獣を見せ、出発台の隅に置き、何故か発砲スチロールの箱を怪獣にかぶせて腰を下ろし、三人の飛行機の出来上がるのを待っている様子。その時、部屋の鳩時計が九時を指し、鳩が出て鳴いた。すぐにたかゆきが気がついて鳩時計を眺めていたが、終わると「いま九時ら」たつま、こうき、りょうたに向かってふざけた調子で歌いだす、と三人も面白がって「いま九時ら」と声を揃え、三人が何回も繰り返しながら飛行機を作っている。りょうたも嬉しそう! お互いに共鳴し合ってとにかく楽しい! そんな姿が伝わって、四人が一緒に何かをしようとしていることに互いの気持ちの確認をし合っているのかな、と保育者は思い、見守る。

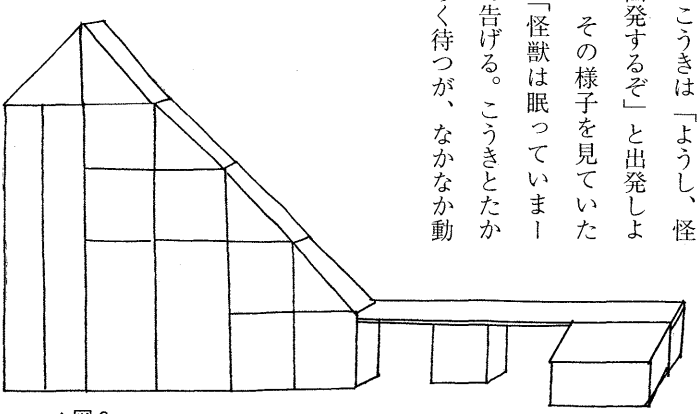
たつまが「できた! せんせい、オレの鉄砲が出るよ」と保育者に見せにきた。見ると飛行機の胴体の下に開けた穴から、厚紙を円筒形にして巻いたものが顔を出している。

「ほんとだー、すごい、いい考えね」と感心すると、「オレのは火と鉄砲が出る」とこうきも得意げに見せてくれる。「こうちゃんのもスゴイ! よく考えたね」と認めながら「りょうちゃんが出発台で待ってるよ」と怪獣ができていることを知らせる。するとたつまが思い付いたように「基地を作らんといかん。基地からダダダダーンと攻撃するんだもん」という。それを聞いたたかゆきとこうきは「そうか、そのことは分からんかった」と言いながら、急ぎ、三人で基地はどんな風にするか、怪獣はどこから現れるのかと。これにつ

いてはこうきが「ダイナの怪獣は雪から現れるだよ」というが、たつまは「土の中から現れるだよ」と言い、話が弾む。どちらとも決まらないまま基地作りが始まった。最初に作った出発台の足の部分を高くしようとするが、たつまのイメージに合わず、何度も積み木を積み直し、最終的には下の図3のような形におさまった。

基地から牛乳パック飛行機出発

三人はどうやって怪獣と戦うか、お互い自分の飛行機を持って話し合っているようだったが、戦略が決まったらしく、基地を挟んで三人は離れた位置に構える。が、たつまがどうも基地が気になるらしく、再び積み木を運んで基地を作る、そこへりょうへい、ゆうすけが登園して基地を見に来る。二人はすぐに「仲間に入れて」とたつまの基地作りに参加するが、「飛行機がいる」とりょうへい、ゆうすけは飛行機作りに造形コーナーへ。こうきが「たつま、怪獣現れたか」とたつまに向かって発信すると、たつまは「まだ現れていない」と応答しながら基地の回りを積み木でさらに固めている。こうきは「ようし、怪獣を探しに出発するぞ」と出発しようとすると、その様子を見ていたりょうたが「怪獣は眠っていまーす」と大声で告げる。こうきとたかゆきはしばらく待つが、なかなか動

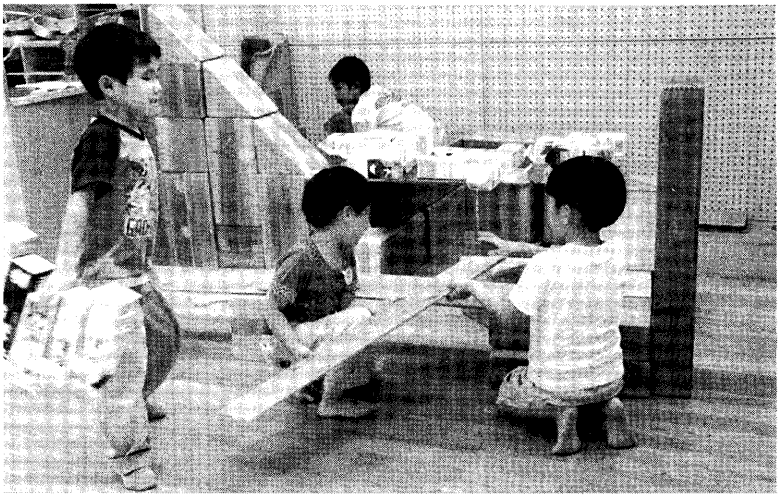


▲図3

きださない。たかゆきは「まだ出てこーん」と怪獣の出番を催促するが、りょうたは「まだ眠っています」と繰り返す。たかゆきは怪獣の上にかぶせてある発砲スチロールの箱を見て「雪に埋められとるのか？」とりょうたに言う。どうなることかと眺めていると、りょうたは「分かった！」と発泡スチロールをかぶせたまま怪獣を持ってデッキへ出て、お日様に当てて暖めているつもり。もう待ちきれなくなったこうきが大声で「残り三十四秒」と叫んだので、ようやくりょうたは「強いぞー　がおー！　がおー！」と怪獣を持って基地に近付いてくる。こうきはただちに飛行機を出発させ、「ダダダダーン」と戦う真似をする。りょうたも「がおーがおー」と叫びながら応じる。たかゆきも続いて飛行機を出発させ、「ダダダダーン」と攻撃する真似をするが、勢いあまって怪獣を持ったりょうたにぶつかり、その拍子に飛行機が壊れてしまった。「いて、りょうたの怪獣強い！」と言いながら、こうきとたつまに「抜けてもいいか」と聞いて造形コーナーへ修理に行く。たかゆきの修理を待っているのか、たつまはさらに積み木を運び、基地を広げている。こうきも積み木を運びだし、みんなの部屋を作るとたつまの積み木につなげ始め、トンネルのような家ができた。

再び怪獣と戦う

その一つ一つに飛行機をスタンバイさせ、こうきとたかゆきが「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1」とカウントダウンするが、二人の出発が合わず、二回目で同時に出発し、りょうたを飛行機を持って追いかける。りょうたが逃げる。たかゆきが「まてー」と追いかけるがうまく攻撃できず、こうきと飛行機を合体させて大きくしようと考え、造形コーナーへ行くがなかなかうまく行かない。そこへようやくりょうへいが作ったばかりの飛行機を持ってりょうたを追いかける。りょうたがつまずいて転ぶ。りょうたは「そっちは三人でずるいじゃないか、もうやめる！」と怒



▲基地づくり

り、さっさとデッキへ出て休憩に入ってしまった。

怪獣がいなくなった四人は戦いの目標を失い、しばらく飛行機を持って保育室を走り回っていたが、園庭へ牛乳パック飛行機を飛ばしに出て行った。途中から参加したりょうへいもよく分からないうちに戦いは終わり、再び造形コーナーへと戻って、また飛行機を作り始めた。時計は九時四十分を指し、始まって六十分余りを経過していた。

この遊びから得たもの

この遊びの始まりは、たつまが牛乳パック飛行機を飛ばして遊ぼうと考えたところから、仲良しのたかゆきに出発台を作ろうと誘いをかけ、たかゆきも賛成し、出発台作りが始まった。

りょうたは登園しているが、どちらかといえば日常一人で自分の欲しいものをコツコツと作って楽しむというところが大きく、今朝も造形コーナーで何を作ろうかと考えていた時（と思われる）、たつまとたかゆ

きがきて新型飛行機作りが始まった。それを見て「ぼくは怪獣」と怪獣を作ろうと決めたのではないか。……その時戦うことをイメージしていたか否かは分からない……。りょうたの怪獣が出来上がって出発台におかれたことや、保育者が怪獣との戦いをイメージしたような「りょうちゃんが出発台で待ってるよ」と声を掛けたことなどが、初めの出発台を作って飛ばそうという目的から、「基地を作らんといかん、ダダダダーン……」と〝怪獣と戦う〟ことを思い付いたのではないか。遊びの出発点でのイメージがそれ程強いものではなかったのか、遊びの過程で回りの状況や言葉を受けて変化していき、遊びの内容が膨らんだと思われる。

遊び、「怪獣と戦おう」は、保育者から見れば偶然、突然出てきたように思ったが、子ども同士の中では、すでに園庭やリズム室などでは楽しまれていた遊びだったかもしれない。牛乳パック飛行機作りは以前から目にしていたが、保育者の頭には、ただ牛乳パックをセロテープで貼り合わせているが、どこが気に入っているのかな、位にしか受け止めていなかった。ましてやこのように大きなものを持ち、高く掲げながらゴーッと部屋や廊下、園庭を駆け回るスピード競争など思ってもみなかった。

年中児の後半に始まったと思われる牛乳パックを貼り合わせた飛行機作りが、次第により飛行機らしくなり、出発台を作る→出発して飛ばせるところへ膨らんできたと考えてよいのであろう。保育者の予想以上に遊びの内容が大まかではあるが豊かであったこと、友だち同志互いのやり取りの中で、それぞれが自分の気持ち、考えを自在に発信し、受け取って遊びを進めていけたこと、自分のイメージしたものを作る、作ったもので遊ぶ、もあったことは、これからの保育の中での一つのベースとして、遊びのきっかけ、子どもにとっての新しさなどを何時、どのように仕掛けていくか楽しみとなった。

（愛知豊川双葉幼稚園）

絵本三昧

(3)絵本の使い手の視点から

宮地　敏子

前回、絵本を読み合うことは喜びの共同体験だと書いたが、その喜びは私は格別に多くいただいてきたのではないかと思う。保育者養成の短大にいて、二十歳前後の学生を対象に、絵本を授業に使ってきた。絵本は優れた教材であり、そのうえ読み合うことで学生から多くの学びを与えられてきた。

第一に「考える」きっかけ、未知への扉を開ける動機づけとなった。子どもの人権についての学習に、『あなたがもし奴隷だったら…』(レスター・ジュリアス・文、ロッド・ブラウン絵、片岡しのぶ訳、あすなろ書房)から、鎖でつないだ黒人を、肩と肩が触れるような狭い棚にびっしり並べて輸送する絵をコピーし、そのなかの一人になっ

たつもりで、隣の人間との会話や独り言を書かせた。上からの糞尿が垂れてきても身動きできない悲惨さに思いを馳せ、みな真剣だった。自分のことばで、怒り、あきらめ、無感動、哀しみ、故郷の思い出などいろいろな独白が出た。アメリカに着くまでに三分の一が死んでしまい、死体は鮫の泳ぐ海にほうり込まれるという史実に、息を飲み、黙した。娘が家族の目前で売られる他の場面も、人権を考えるきっかけになった。

異文化理解の絵本として、学生が選んできた一冊に『トゥートとパドル』（ホリー・ホビー作、二宮由紀子訳、BL出版）があった。グループ発表で、はじめに学生がクラスになげかけた質問は、「あなたは登場人物の性格でどちらに近いですか？」という質問だった。積極的に世界旅行するトゥートより、家の周囲で喜びを見いだすパドルに自分を重ねる学生が多かった。次に、「この二人の友情を成り立たせているのは何でしょう？」と問い掛けた。人格を認めること、寛容さ、相互の尊敬、自分の生き方への自信、喜びを見いだす前向きな姿勢など、学生たちは友情の成立の条件を探っていった。それは異文化理解とは何かと問うのと同じではないかと、発表者たちは考えたのである。

このように、子どもの権利条件、人権保育、異文化理解、幼年童話と絵本の比較など、いろいろなテーマについて考えるきっかけづくりに、絵本を使用してきた。

第二に、絵本は彼らに自分自身を顧みる機会を与えた。

レオ・レオニの『じぶんだけのいろ』『フレデリック』『さかなはさかな』（いずれも谷川俊太郎訳、好学社）あるいはエリック・カールの『ごちゃまぜカメレオン』（八木田宜子訳、ほるぷ出

版）などは、人に迎合しやすい自分に気付き、また自分を肯定的にとらえる機会を与えたようだ。絵本は登場人物の子どもを「あるがまま認め」さらなる一歩へと誘っていく。

いままでの学校生活のなかで、教師との関係で鬱屈した気持ちを抱いてきた学生には、灰谷健次郎の諸作品や、『いつもちこくのおとこのこ ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー』（ジョン・バーニンガム作、谷川俊太郎訳、あかね書房）が、「聴く」ことの大切さを伝え、また子ども（過去の自分）の正当性と同時に、教師も自分と同じように弱点をもつ一人の人間であるという理解を進めたようだ。

『おおきな木』（シェル・シルヴァスタイン作絵、ほんだきんいちろう訳、篠崎書林）は、恋人や家族をも巻き込んだ「愛」を考える機会になった。THE GIVING TREEが原題で、一本のりんごの木が一人の人間の少年から老年にいたるまで、自分のすべてを請われるままに与え尽くす物語である。『子どもとファンタジー…絵本による子どもの「自己」の発見』（守屋慶子、新進社）に記載された小学校から大学まで数か国の子どもたちの感想を抜き出して資料にし、自分の感想、親の、恋人の感想などと比較検討した。りんごの木に無償の愛を感じて感動する者、少年に自分を重ねて反省する者、りんごの木の愛は自己犠牲であってほんものの愛ではないととらえる者、親を木になぞらえる者、未来がない残酷な話だという者、実にさまざまだった。絵本に触発されて、自分自身を見つめ、意見を表明し合った時間だった。

自分を愛することができなくては、子ども＝人間を愛することはできない。自分を信じなくては子ども＝人間を信じることはできない。生まれた愛には持ち主はない。こういう気付きへと、絵本は導いてくれる。

第三に、保育者をめざす学生にとって、絵本は子どもの目線を理解するのに極めて有効だ。話がそれるが、絵本が何かの「役に立つ」という発言をすると、どうも批判を浴びるようだ。かつて絵本の効果をいくつかの実例をあげ「こころのお薬」と表現したことがあったのだが、講演の後、絵本を速効の薬のようにいうのはどうかと思うと言う感想が寄せられた。しかし、絵本を伝えてきた経験からいうと、絵本は、実に豊かなもので、確実に精神性や直観を磨く役に立つ。忘れてはならないのは、それが目に見える形で計れないことだ。悲しい気持ちでいる子どものこころに、ある絵本を伝えればすぐに明るくなることもあれば、そうはならないけれど、ぬくもりとしてどこかにしまわれて、それが強さになっていくこともある。一過性の楽しい絵本もあれば、意味が深くよく理解できないけれど、いやすぐには理解できないからこそ、忘れられずに残っていく絵本もある。多くの絵本を読んでもらって、自らの「効果」にしていくのは、いつでも一人ひとりの子ども自身なのだ。「ああ、そんなこともあった」「そうそう、いまからすれば、なんであんなことにこだわったのかわからない」「この子の気持ち、小さい頃のわたしそっくり」というように、〝事実〟として、学生が子どもの目をもてたと思えば幼児理解に一歩近付くのではないだろうか。「むかし、いちどは子どもだった」学生は、絵本によって、自分の子どものころを、鮮明に思い出す。そして、繊細な直観的な感性を、再び磨き出す。

ある学生が「先生をテーマとした絵本」を発表したとき、『いっちゃんはね、おしゃべりがした

いのにね』（灰谷健次郎文、長谷川集平絵、理論社）を読んだ。読みおわったときのクラスの共感に満ちた沈黙を今でも思い出す。彼女はその絵本を担任の先生からもらったという。今でいう登園拒否に近い自分が、その先生だけをよりどころに保育園に通っていたと言った。きっとキュープラー・ロスのいう子どもの〝象徴言語〟を解する教師だったにちがいない。大人ならなんでもないことが、子どもにとって岩のように重いときがある。それを一緒に負うことができる教師像を、この絵本は描いている。

『いいこってどんなこ？』（ジーン・モデシット文、ロビン・スポワート絵、もきかずこ訳、冨山房）は、母子関係についての授業で使用した。学生を五歳児役と母親役に分け、「いいこってどんなこ？」と子ども役が尋ねそれに対して母親はどう答えるかロールプレイをした。尋ねる側に、母親がした答えに対し、どのように感じたかを後で聞いた。「いいこってどんなこ？」「好き嫌いなくなんでも食べる子」「いいこってどんな子？」「おともだちとなかよくできる子」「いいこってどんなこ？」「お母さんのいうことをきく子」母親役はなにかと注文をつけ、子ども役は母親の期待を重荷と感じる者が多かった。その話し合いの後に、この絵本を読んだ。「バニーはバニーらしくしていてくれるのがいちばんよ」ということばに、ほっとした表情が広がっていった。

さて、今、インドの大学で、絵本を使用する授業を中国日本研究科の講座でやり始めている。あいうえお絵本や挨拶の絵本などに学生たちは興味津々だ。絵本がどう受け入れられるかこれからが楽しみだ。

（洗足学園短期大学・デリー大学）

育児に悩む保護者に保育者ができること

渡邊ユカリ

小さい子どもをもつ保護者の育児不安や虐待の事件は、毎日子どもと保護者に接する保育者にとっては他人ごとではありません。かわいいわが子を育てるのに、なぜ不安になったり、虐待するのだろう…、と疑問に思う人も多いことでしょう。保護者が〝子育てがうまくいかない〟と感じるのは、なぜなのでしょうか？保育者にはいったい何ができるのでしょうか？

東京都公立幼稚園教諭として八年間勤務し、私自身が幼児をもつ母親であり、育児に不安をもつ保護者の気持ちをより深く理解したいと考えました。そこで、「育児中の保護者がどんなことに不安を抱くのか。その実体を子育て支援センターにどのように反映させていくか」を目的としてアンケート調査をしました。

（データはすべて私と秋草学園短期大学の中村陽一先

生が、都内の幼稚園の保護者一六三名から回答を得たアンケート調査の結果です。アンケート実施は一九九九年。二〇〇〇年度日本保育学会にて一部発表）このアンケートの結果を見ながら、育児中の保護者の悩みや保護者へのサポートについて、私の経験から述べたいと思います。

育児がうまくいかないことよりも、「わたしだけが悩んでいる」と思うことが保護者の悩み

約七割の保護者が、子育てに何らかの不安をもっていた

まず、図2の結果を見てみますと、「子育てにたいへん苦労している」「わりと苦労している」と感じている保護者は二割、感じていない人は約三割でした。

ただ、「子育てをする上で、不安になることはありますか」という問いには、七割近い人たちが「はい（ある）」と答えています。地域性や質問のしかたに

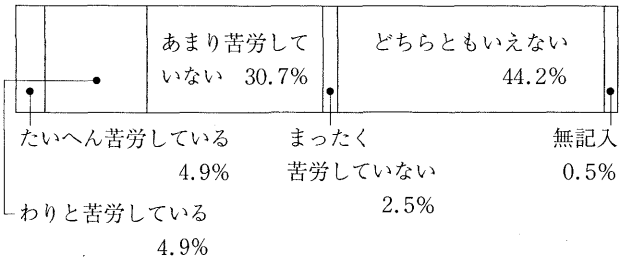
図1

Q　子育てをする上で、不安になることはありますか？

はい	いいえ
68.7%	31.3%

図2

Q　子育てに苦労していますか？



よっても大きく左右されますが、半数以上の保護者の方が、多かれ少なかれ子育てに対する不安を抱いているといえます。

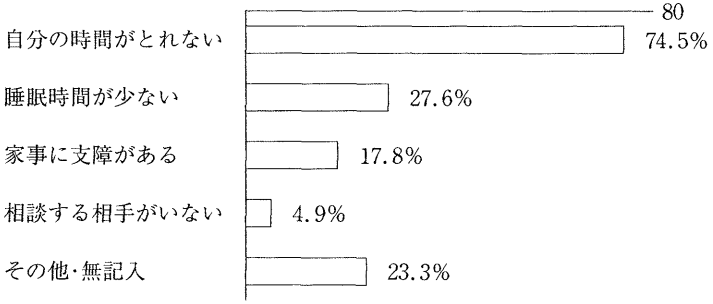
保護者の悩みの内容もさまざまですが、小さい子どもに対する悩みが、発達や健康など子ども自身にかかわるものが多かったのに対して、三歳以上になるとお友達との関係など、子どもを取り巻く環境や人間関係に対する不安が多くなる傾向がありました。

たたいたり、強くしかったりと、しつけのエスカレートに対する悩みも一部にみられます。数はあまり多くはありませんが、こういうケースは、保護者本人へのサポートをしていかないと、大きな虐待につながる場合があるかもしれません。

一人で思いつめていく保護者たち

保護者の方たちの不安の内容をみると、特殊なものではなく、みんなが同じようなことで悩んでいるように感じます。

Q　子育てをしていてつらいと思うのはどんなときですか？（複数回答）



「睡眠時間が少ない」という回答は、３歳未満の子どもがいる保護者に多くみられます。また、「自分の時間がとれない」という悩みは３歳以上の子どもがいる保護者の回答にも多くみられ、育児に時間をとられてしまうことを、不安や苦痛に感じる人が多いことがわかります。

Q　子育てで不安になることはどんなことですか？（自由記述より）

○食事に時間がかかる

●子どもが２人とも寝付きが悪く、眠らせるのがたいへん。

○しかるときにすぐに手をあげてしまい、子どもに精神的苦痛を与えているのでは不安

●友達とのコミュニケーション（友達づくり）がなかなかできない。特定の友達としかおしゃべりできない。

○今の自分の子育てがよいのか悪いのかは、何十年後かにかに結果がでるので不安。

●自分の都合で思いどうりにことがすすまないと、つい子どもを強くしかってしまうことがある。

実際、私が現場（幼稚園）で接していた保護者の方からも、お友達と仲良く遊べないとか、一人遊びばかりしている。ボタンが掛けられない、ハサミが使えないといった心配ごとが、毎年のように出てきました。

たくさんの子どもを見てきた保育者からすれば、四歳でも、お友達と遊べない子、ボタンが掛けられない子などは特殊な存在ではありません。

ところが保護者は、育児書に〝三歳をすぎるとお友達と遊べるようになってくる〟などと書いてあると、「なぜうちの子はできないんだろう」「お友達みんなができているのにどうしてうちの子だけできないんだろう」と考えてしまいます。

保護者の悩みの問題は、子どもができないことではなく、「自分ばかりが」「自分の子だけが」というところにあると思います。

育児書の情報はたくさんもっていても、生きた情報に接する機会が少ないと、まわりの数人のお友達と比べて、ちょっと違うことがあると、一人で悩んでしま

うのでしょう。中には、一人で思いつめて、子どもを責めたりする方もあるかもしれません。

けれども私の経験からいうと、「自分だけ」と悩んでいる方には、「○○さんだけでなくて、ほかの方も同じように悩んでいらっしゃいますよ」と伝えるだけで、とても安心なさるようです。

早い段階で、ほんの少し視野を広げてあげることで、そこまで深刻にならないですむケースが多いのではないかと思います。その役割を、保護者と身近に接する保育者ができればよいのではないでしょうか。

保護者の気持ちは否定しない
―みんな悩みながら子どもを育てている、ということを伝えたい

まずは、保護者のいいたいことを受け入れるところから始める

現場（幼稚園）で保育者として私自身が心掛けていたのは、カウンセリングマインドでした。保護者の気

Q　子育ての不安や悩みを解決するために、どのような施設やシステムがあるといいと思いますか？（複数回答）

●子育てセンター	38.0%
●幼稚園で相談できるとよい	23.9%
●児童館	16.6%
●児童相談所	11.7%
●保育所	6.7%
●保育所で相談できるとよい	6.7%
●その他・無記入	34.3%

※回答者が、幼稚園の保護者だけに、子育てセンターだけでなく、園に対しても育児の悩みなどを相談したいという期待感が表れています。

持ちを受け入れて、共感することを第一に考えました。

具体的にいうと、保育者の側から「こうしてください」「ああしてください」と、一方的に指示はしません。とにかく保護者の気持ちを十分に聞いて、受け入れるようにしました。悩みや問題が大きいほど、保護者は言いたいことが積もっているものです。また、悩みを相談できる人がいないということが、さらに悩みを深くしているといえるでしょう。

気がつくと一時間以上保護者の話を聞いていたということもあります。その内容は子育てをしていくうえでの悩みや、園生活への不安などさまざまですが、とにかくじっくりと聞きました。

保護者の、いわゆるストレスになっていることをよく聞き、十分に受け入れることで、保護者に安心感をもってもらうことができると思います。お互いに安心感をもつことが、本音で話し合いのできるコミュニケーションと信頼関係を築く基本であると実感しています。

保護者に伝えたいことは、直球ではなく、カーブで

ときには保護者に対して、保育中に気になった子どもの様子や対応のしかたなど、言いにくいことでもお伝えしなければならないこともあります。

保護者との信頼関係がどのくらいできているかによって、表現のしかたも違ってきますが、「子育てを園と家庭と同じ方針でやっていきましょう」ということを確かめていくことが大切です。そのためにも、子どもの気になる姿を、適切に率直に保護者に伝えたいと考えていました。

けれども、子育てに悩んでいる保護者の場合、その伝え方によっては、さらに悩みを深めてしまうこともあります。ですから、保護者への伝え方をボールの投げ方に例えるならば、私は〝ストレートに言わずに、はじめは緩やかなカーブを投げるように〟をモットーにしました。

保護者の話を聞きながら、伝えておきたいことを、思いやりをもってやさしく伝えるようにします。いつまでもカーブのままでは伝わらないこともありますので、信頼関係ができたところでストレートな伝え方をしました。その辺りの見極め方は微妙ですが…。

保育者が子どもをみていてくれる と思うことが、保護者の安心に

育児に自信のない保護者は、子どもが園でちゃんとやっているのかどうか心配していることも多いので、園での子どもの姿を具体的にお伝えするようにしました。

伝える内容は、ほんのささいなことでいいのです。例えば「今日はカタツムリを十匹も見つけたんですよ」とか、「色水が上手にできました」など、細かいことをていねいに拾って、お帰りのときに一人に一つずつ、その日にあったことを伝えるようにしました。

とはいえ、入園当初などは、一人一人の子どもの様子をみていくこともたいへんです。私も、名前と顔が一致しないうちは、メモをとっていたこともあります。一日に全員が無理なら、はじめは一日に何人と決めて、一週間で全員の子をみられるようにしてもよいでしょう。

保育者自身が、その子をとてもかわいいと思っている、その成長を喜んでいるということは、保護者にとっても喜びです。

また、園全体でその子を育てているんだということが、保護者に伝わるようにすることも大切です。「園長、主任、担任、職員、みんなみていますよ」という心のつながりが、一人で悩んでいる保護者にとっても、気持ちの支えになっていくと思います。

深刻なケースは、一人で抱え込まず、みんなの問題に

保護者の育児の悩みに接するのは、若い保育者に

とって不安が多いものです。

私自身、いろいろとわからないことが山積していたと、今あらためて思います。けれども、若くても、経験が浅くとも、保育のプロとして自信をもって保護者に接してほしいと考えています。

若い保育者でも、「園と家庭と、一緒に子どもを育てていきましょう」という気持ちを伝えることが、保護者に安心してもらう一つのきっかけにもなるものです。

しかしながら、育児不安の問題は、とても深刻なケースも多いので、保育者もすべてを一人で抱え込まないように気をつけてほしいと思います。

経験が少なければ、それだけにパニックになることも多いわけですから、そうなる前に、いろいろな人に相談することです。自分にはみえていなくても、実は別の保育者がみていてくれていることもあります。

子どもがいる先輩や同僚の保育者に、保育者としてではなく、保護者としての本音の部分を聞いてみてもいいのかもしれません。私自身、保育者でありながら、自分の子どもの入園のときには緊張したものです。そんな話を聞くことができれば、保護者の不安や悩みも、すっと自分の気持ちの中に入ってくるのではないでしょうか。

育児に悩む保護者にとって、特に相談できる相手が身近に得られないことによる育児不安の増大は、解決すべき重要課題です。しかし、実は、一番身近にいるのが保育者なのであり〝相談できる関係（信頼関係）を築いていくことが解決への近道であるということを認識すること〟が、育児に悩む保護者に保育者ができることの原点ではないでしょうか。

（秋草学園短期大学）

第二回保育参加ウィーク「四勝一敗」

入江　礼子

第一回保育参加ウィークを振り返って

保育の方針を少しでも子ども主体の方向にシフトしたいと努力し始めて八ヶ月。昨年の十一月末から十二月初めにかけての一週間、第二回目の保育参加ウィークを行った。前回の保育参加ウィークについては本誌一〇〇巻第十号に書かせて頂いた。それから半年弱が経ったことになる。

前回はマジックミラーを使っての保護者の保育観察日を廃止しての新しい試みの第一回目だった。その結果「三勝二敗」という言葉で表現させて頂いたように、この行事に参加しての感想は肯定的なものと否定的なものが相半ばし、かろうじて肯定的な意見が多く出された日が多かったというものに終わった。肯定的

な意見は保育に参加して下さった保護者から出されることが多く、否定的なものは保育を参観してくださった方から出されることが多いという特徴もその時明らかになった。また「先生の働きかけが弱いのではないか。もう少しかかわると子どもたちがもっと楽しく過ごせると思いますよ」「お部屋のなかがなんだかがらんとしてお部屋にいる子どもたちもいるのだけれど、なんだかてもちぶさただったみたい。先生方もみんな外に出払っているので、私、一緒に遊びました」等々、今の私たちの保育で抜けたり、欠けたりしているところを鋭く突く意見も出された。私たちとしては、本当は園を保護者に開放するのはもう少し保育の質が上がってからにしたいというのが本音であった。しかしあえてそこで発想を切り替えて「ありのままを見てもらって話し合ってみよう」ということにしての結果が「三勝二敗」ということだったのである。

前回は年中組の保護者たちが幼稚園に慣れ始めている我が子の姿を見て安心したことで、肯定的な意見を多く出して下さる方も多かった。しかし子どもたちが園生活に慣れた今回は前回以上に保育の内容について目が向くことも予想され、保育参加ウィークを実施するにあたっては私たち自身の保育の質を少しでも高める必要があることは明白だった。

しかしながら、保育の質を上げるといってもそれは一朝一夕にできるものではない。日々牛の歩みを続けていくしかないという辛さもあった。そのうえ二学期は行事が目白押しである。九月末の運動会、十月末の生活発表会、十一月半ばの作品展。どれをとっても普段の子どもたちの園生活を保障しながらやっていくにはしんどすぎる。そこで職員会議で話し合って、昨年は十月に行った生活発表会を二月に先送りすることに

した。運動会は初等部と合同、作品展は幼稚部から大学までの学園祭の一環であり、幼稚部の判断だけで動かすことはできない。そこで唯一動かせる生活発表会を先送りしたのである。

第二回保育参加ウィークまでの経過

◇九月

こうして二学期が始まった。しかし運動会の練習が始まると、特別に配慮を必要とする子どもたちが目立つことが多くなった。運動会の練習が、大きい集団とそれからはみ出た個という構造を作ってしまい、大きい集団に属する方も集団に呼び込む働きかけしかせず、さらにそれでも参加しない場合、子どもたちの中に「○○ちゃんは一緒に来ない子、困った子」という「はみ出る子どもたちを作る構造」になってしまったということだ。これは私たちの保育を再考する良いチャンスだ。そう考え、園内研修でこのような状況を作ってしまった根本を考えるために、それぞれの保育者が自分の園での役割をどう考えているかを話し合った。

担任を持つ保育者からは「今まではいつも前年と同じことをやっていた。自分で変えようという気もなく、自分のなかにアイディアもない。考える力も乏しかったのだと実感した。今はこれまで保育観を作ってこなかった自分に気づいた。今、すぐには変えられないけれど、変えようとしている自分が今はいる」「何をどうすれば良いか分からないのに、他の保育者に聞くことも出来ずに過ごしていた。自分の保育に対する不安や心配がいっぱいあるのに言えなかった。しかし今年の研修で自分の足りないところが少しはわかった」「何となく保育者になった。小学校教師を目指していたので幼稚園とはどんなところか勉強もせずにきた。毎日をとりあえずクリアーしなければという気持ちだけで過ごしてきてしまった」と、主として自分の今までの幼稚園教諭としての歩み、そして悩みが吐露された。このようなことが語られた後、他園を経験し

ているフリーの保育者から「フリーの保育者は担任と願いが一緒ではないとダメな部分がある。特に特別に配慮を必要とする子どもたちに対してはそこがポイントになることも多い」「今日の保育に関してはどうして十時半になったときに他の遊びを中断して片づけになったのか。今日の子どもたちを見ていると、運動会の練習が終わったためかクラスのあちこちで思い思いの遊びが展開されていた。それでもその時間に片づけにすることの意味を考える必要があるのではないか」という意見が出された。

「過去の振り返り」とまさに「今日の保育の振り返り」の問題が同時に出されたのである。そしてこういう時にこそ再度一日の保育の流れを子どもたちの様子を見ながら考え直す必要があるという意見が出された。他のメンバーもそれに賛同し、十月からこれらに留意し、保育を行ってみることになった。

◇十月

その後の保育の変化はドラスティックといってもよいほどのものであった。一学期をかけて少しずつ朝の子どもが遊びを選ぶ時間を延ばし、やっと十時半くらいまではそういう時間が確保されるようになってはいた。

しかし、この日を境に大きな変化があった。まず、四歳児のクラスがお弁当まで遊び続けた。それだけではなく、その日お弁当を食べる場所も自由になった。また保育室の環境にも変化が出てきた。「保育室がざわめきはじめた」とは副園長のNさんの言である。保育室の環境に「もの」が出始めた。保育室内の環境については前回の保育参加ウィークの時にも保護者に「お部屋のなかがなんだかがらんとしてお部屋にいる子どもたちもいるのだけれど、なんだか手持ちぶさただったみたい。先生方もみんな外に出払っているので、私、一緒に遊びました」と指摘されている。昨年までの保育では「子どもたちが必要な時に必要なものに出会えるように配慮する」というコンセプトはなかったのだ。

こうして一日の流れは大まかにあるものの、今までよりは活動の区切りが緩やかになってきた。日によってはお弁当の時間が十二時半頃ということもあった。さすがにその時は私も心穏やかではなかった。いくら時間の壁を取り払ったとはいえ、子どもの体のリズムを無視することはできないからである。お腹が空きすぎてしまえば、空腹感はなくなる。お弁当に誘っても「もっと遊びたい」という返事が返ってくる。しかし、その遊びをみてみると惰性で遊んでいるとも思えるようなものだったりする。こういう失敗を幾つも重ねた。だがそういうことはあっても、今までの枠を取り払ってみようと考えて実行している保育者たちの勇気には脱帽することも多かった。

こうして、三歳児、四歳児のクラスは登園して着替えを済ませたら遊ぶという生活が定着し始めた。その遊びのなかに保育者が自分のしたい活動、あるいは子どもたちに経験して欲しい活動を組み込んでやっていくということも増えた。

一方、昨年までのやり方で二年間を過ごしている五歳児のクラスは、朝の集まりだけはどうしてもはずせず、九時十五分に一度集まって出席をとり、朝の一斉活動をしてから子どもが遊びを選ぶ時間に移行するという流れとなった。子どもたちがその流れに慣れているということもあったし、親からの五歳になって朝の集まりもないというのでは余りにもけじめがないという意見もあってのことである（この園の親の考え方については前回の一〇〇巻第十号を参照頂きたい）。そんな状況の中、担任は悩んだ挙げ句、年長はこの流れで行くと決断した。結果として、九時から十時前まで園庭に出て遊んでいるのは三歳児、四歳児だけということになり、三歳児から五歳児が混ざって遊んでいる時間はその後の約一時間ということになってしまった。一つの幼稚園のなかに二つのタイプの違う幼稚園が同居しているような状態となったのである。

◇十一月

十一月の半ばには作品展があった。その直後、二十

六日から始まる保育参加ウィークをどのようにやっていくのかという準備の話し合いを持った。前回は「ともかくありのままを見て貰う」「そして、それをもとに保護者との話し合いを持つ」ということを大きな柱としていた。その結果が三勝二敗ということだったわけである。今回は少しでも自分たちの保育を「理解して貰う」ための準備を行ってその週を迎えることにした。

まず、一つの園に二つの幼稚園があるような状態をどうするかということが話し合われたが、そのために慌てて統一するのはおかしいということになり、今はまさに文字通り過渡期であるということで、その部分はありのままに見て貰うことになった。

前回は保育に「参加」して体を動かしてくださった保護者の方の多くは肯定的な意見が述べられることが多く、その一方で「参観」だけの方からはマイナス面だけを取り上げて批判されることが多かった（勿論、私たちの至らなさの結果なのであるが）。そこで今回はまず保育に保護者が参加できる工夫をした計画を立てること、次に、ただ遊んでいるだけでいいのかという意見も多く出されたことに鑑み、少しでも保護者にとって保育が分かりやすいように資料を出すことにした。

具体的には担任に保護者に分かりやすい日案と先週までの子どもの姿が見やすいような環境図を書いてもらった。私たちの園では週日案は作っているが日案は作成していない。一週間分の日案を作ることは担任にとってはかなりの負担となることであった。けれども自分たちの保育を理解して欲しいと考えるのならば、この労はいとえないのではないかと、トップダウンではあったが担任にお願いしたのである。その日に参加

される保護者には日案と環境図をお渡しする。そのことでたとえ少数ではあっても何人かの保護者の方が日々の保育が決して行き当たりバッタリで行われているのではないことをなんとか感じてくだされば、それでよし。効率は悪いが今のところそれ以上のアイディアが浮かばないのが現状であった。そのほかにも保護者も製作などの活動に参加できるように材料を十分に揃えて置くための具体案が話し合われた。

第二回保育参加ウィークを実施して

時間は九時からお弁当を食べ終えるまでとし、前回より参加時間を長くした。蓋を開けてみて分かったことは今回は「参加」するつもりの保護者がほとんどだったことである。前回、参加と参観が相半ばしていたのとは大きく異なる。お母さんたちはスラックス姿の方が多く、寒くても大丈夫なように防寒着も持参されていた。予想通り体を動かし、子どもたちと一緒に製作をされた方からは「自分が楽しんでしまいました」「子どもたちのセンスってその意外性が面白いですね」「家から持っていった廃品（牛乳パックや毛糸など）が、こんな形で役立っているのをみて嬉しかったです」「うちの子、集中しないとばかり思っていたのですけれど、ちゃんと集中してやっているのをみてびっくりしました」などなどの意見が出された。

また前回と比較してということで「年長さんが前より小さい子どもたちにやさしくなっているように思います」「六月と比べると、遊びが多様性を帯びてきたし、お部屋のなかにも色々な素材が置かれるようになってきたんですね。なぜ遊びがこんなに変わってきたのですか？　次回が楽しみです」「前回は先生が大変そうで、お手伝いしなきゃと思ったのですが、今回は手持ちぶさたで。それだけ子どもたちが色んなことをやっていましたね」「日案や環境図を見せて頂いて、子どもたちの活動の中からいろいろ引き出していることが分かりました」という意見も寄せられた。一方、数名の参加しないで見学にまわった方からは予想通り

「メリハリがない」「けじめがない」等の意見が出された。しかし、前回と変わったことは、その際話し合いに一緒に参加している保護者の方から「そういう面もあるかも知れないけれど、一日中そうではないし、トータルとしてみると、前回より育っていると思う」等の意見が交わされるようになったことである。

保護者はよく見ている。保育室の環境設定等が少なくとも前回よりはよくなっていることの指摘もあったし、さらに次回を期待しているとの声も上がった。つまり、まだまだ改善の余地があるということだ。子どもたちが自分より幼い子どもたちに優しくなったという指摘も保育者が頑張って異年齢の保育に力を入れていることに気づかれたということでもある。また一部にマイナス意見もあったが、実のところ、残念ながらそれは私たちの今の保育の実態でもある。

四勝一敗。これが今回の結果である。私たちの未熟さを十分理解した上でプラスに考えてくださる保護者に支えられての結果ともいえる。この参加ウィークがあることで保育者もまた自分の保育を振り返るチャンスとなり、自分のその時点での限界もはっきりみえてくる。次回はどうなるのか。日々の保育を大切にしつつその日を迎えたいと思う。

（鎌倉女子大学・同幼稚部）

編集後記

四月の桜の花の咲くころになると、誘い合って近くの神社の境内で〝お花見〟をしたことが思い出されます。初めて誘われたときはどんな準備をしたらよいのかと緊張しました。けれども、目なたにござを敷いて、ありあわせのお弁当を広げて、小さい子たちと〝お花見〟をしていると、そこには心休まるひとときがありました。

＊

今月は幼稚園からの記事が集まりました。新学期の忙しさを一時傍らにおいて、子どもたちの楽しげな様子に一息ついていただければうれしいです。

新連載も始まります。阿部康子先生には、自然豊かな園で五歳児とくりひろげる一年間を、「遊びを通して子どもの育ちを考える」として、嶺村法子先生には、都会の園の子どもたちと展開する日々のあれこれを「TO・NI・KARAひろば」と題して、書いていただく予定をしています。

もう一つの新連載は吉増克實先生の「三木成夫といのちの世界」です。昨年末に、吉増先生のお話を直接お聞きする機会があり、三木成夫の講演集の一つ『内臓のはたらきと子どものこころ』（築地書館）を紹介されました。早速、読んでみると、解剖学者・三木氏の、ご自分のお子さんを観察する目の温かさを感じました。これからの連載が楽しみです。

（A）

幼児の教育

第一〇一巻　第四号
（二〇〇二年四月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十四年四月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―二二―一
発売所　株式会社フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

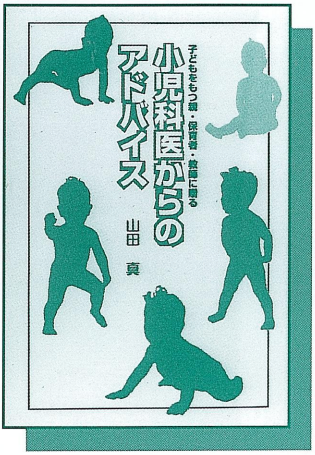
子どもの病気や事故について、その判断に迷った時の
よきバイブルとしてご活用ください。

最新刊

子どもをもつ親・保育者・教師に贈る

小児科医からのアドバイス

山田　真　著
（八王子中央診療所所長）



子どもが次のような症状の時、
保育者としてどう対処されていますか？

①子どもが熱を出した時、
　登園できる目安は何度か。
②発疹が出たら
　必ず園を休ませねばならないのか。
③「予防注射の当日や風邪をひいた時は、
　風呂に入ってはいけない」は本当か。
④子どもの事故で
　気をつけねばならないことは何か。

など、子どものからだと病気の基礎知識について、
困った時の対処法についてやさしく丁寧に解説します。

●主な内容

1章　うつる病気の基礎知識
　ウイルスと細菌、免疫、うつる期間、不顕性感染、再感染
2章　発疹の出る感染症
　感染症の見分け方、突発性発疹と麻疹、風疹と水痘、手足口病と伝染性紅斑、溶連菌感染症
3章　その他の感染症
　おたふくかぜ、マイコプラズマ肺炎、夏にはやる病気
4章　下痢、嘔吐、便秘
　冬にはやる下痢と感染症、小球形ウイルス感染症、その他の下痢、嘔吐、便秘
5章　アレルギーによる病気
　アレルギーとは、気管支ぜんそく、アトピー性皮膚炎
6章　子どもの発熱
　発熱について、微熱、ひきつけ
7章　病気の症状
　子どものせき、はなみずとくしゃみ、川崎病、繰り返し病、成長痛、子どもの問題行動、リンパ節のはれ
8章　質問に答える
　おねしょ、下半身の話、子どもの事故、入浴について、予防接種、安静について、食事について、出席停止基準、小児科医の心得

四六判　224ページ　定価：本体1,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

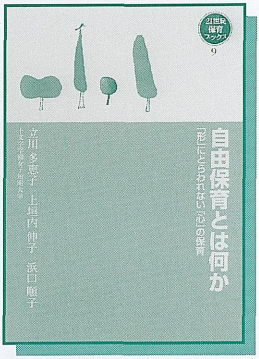
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

編集委員　森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

最新刊



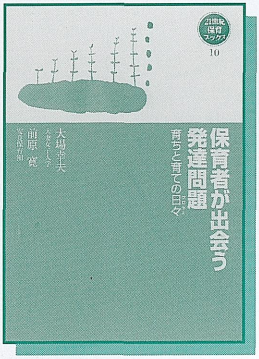
21世紀保育ブックス⑨

自由保育とは何か
「形」にとらわれない「心」の保育

立川多恵子　上垣内伸子　浜口順子
十文字学園女子短期大学

近頃、青少年による問題行動の多発の要因として、幼児教育のあり方が取り沙汰されています。その中には「自由保育」が要因になっているのでは、という声もあります。この「自由保育」批判を耳にして立ち止まり、これまでの貴重な経験や豊富な実践事例、長年の歴史研究を通して、改めて「自由保育とは何か」を模索し、保育の本質に触れていきます。

Ｂ６判　184頁　定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス⑩

保育者が出会う発達問題
育ちと育ての日々（プロセス）

大場幸夫　大妻女子大学　**前原　寛**　安良保育園

私たちが理解しようとしてきた発達は、子どもの育ちという現象を外から当てはめた尺度をもって計りにかけるような捉え方をしがちでした。保育所保育指針や幼稚園教育要領が改訂され、「発達の過程」を大事にするという方向へ進もうとしている現在でも、その姿勢を変えるのは容易なことではありません。一人ひとりの子どもの興味や関心、意欲などを、生活を共にしながら捉えて、育ちの発達にかかわっていくその道行きを大事にしながら、現実の保育の問題として「発達」について考えます。

Ｂ６判　208頁　定価：本体1,200円＋税

既刊本

①新しい教育要領・保育指針のすべて	森上史朗　著	⑤知的好奇心を育てる保育	無藤　隆　著
②新時代の保育サービス	柏女霊峰・山本真実　共著	⑥保育者の「出番」を考える	吉村真理子　著
③カウンセリングマインドの探究	柴崎正行・田代和美　共著	⑦地方自治体の保育への取り組み	山本真実・尾木まり　共著
④子ども虐待の理解と対応	庄司順一　著	⑧乳幼児期の「心の教育」を考える	阿部和子　著

＜以下続刊＞

キンダーブックの
フレーベル館

＜わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。